
天使の罰

アルフォンス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の罰

【Nコード】

N2378A

【作者名】

アルフォンス

【あらすじ】

禁忌を犯した二人の兄弟。天使から罰を受けるのだが、兄は弟を守るため、死神となった。弟は今まで通りの生活をおくっている。だが、そんな兄弟にはさらなる罰が……

第一話

12月23日

「お母さん、明日、クリスマス？」

5歳くらいの少女が、隣にいるお母さんにそう聞いた。

「クリスマス・イヴよ。クリスマスは、明後日」

「くりすます・いう？」

イヴという発音ができないのか、いうになってしまふ。そんな少女に、お母さんは優しく言う。

「違うわ。クリスマス・イヴ」

「クリスマス・いう？」

「ク・リ・ス・マ・ス・イ・ヴ」

「クリスマス・イヴ！」

夜の道を歩きながら、楽しそうに話す親子。明日は年に一度のクリスマス。

買いだしに出かけていたのだ。

少女は赤いコートを着て、手袋をしている。

お母さんと手を繋ぎながら、マンションの通りを歩いている時だった。

背中には大きなカマを背負い、フード付きの黒い服を着た13歳ぐらいの少年が親子とすれ違った。

でも、その親子には少年が見えていないようだった。

その時、前方からきた一台のトラックが、親子と衝突した。

お母さんは少女をかばう形で数メートル先に飛ばされた。頭から血が流れ出ている。おそらく、二人とも即死だろう。

少年は右足で地面を軽く蹴ると、宙に舞い、親子の場所に下りた。

そして、背負っていたカマを両手で持ち、斜めに高々と振りかざし、二人を斬った。

風を切る音が聞こえた。

それは一瞬の出来事だった。

親子二人の身体から、青白い光がでてきた。その青白い光を魂という。

魂は親子の身体から離れた。少年が何かを唱えている。途端に巨大な門が現れた。

その門が開き、中から声が聞こえた。

誰の魂だ？

「ドイツ・ベルリンに住む、ベーカー親子。母親と娘だ」

ほう。お前は今、故郷の近くにいるのだな

「早くしろ」

せっかちな奴だ。弟の様子を見るために来たのだろう。本当はロシアの方に行く予定・・・・・・・・

「ハリー！！（早く！！）」

久々に聞いたぞ・・・・・・・・その言葉

親子の魂は門の中へと消えていった・・・・・・・・

//お前はロシアに行けという命を下したはずだ//

「く・・・・・・・・」

//命を変更する//

「何？」

//ドイツで仕事をしろ。私の命が下るまでだ//

「御意」

第一話（後書き）

今度は、死神をテーマにしてみました^^

第二話

俺だけでいいんだ！

〃あなた達は禁忌を犯したのですよ〃

罰を受けるのは俺だけでいい！

〃禁忌を犯した者には罰を。助かることはありません〃

お願いだ！こいつだけは・・・弟だけは・・・

〃あなたが死神になると誓うのならば、弟は助けましょう〃

俺が死神に？そしたら、弟は助かるんだな？

〃ええ。それでもいいのなら〃

わかった。俺、死神になる

兄さん！そんなのイヤだよ！

お前まで巻き込んで悪かった。全部、俺が悪いんだ

死神になんて、ならないで！僕が自分の意思でやったことなんだよ！

俺が決めたことなんだ。お前は反対したのにな・・・

違う。違うんだ、兄さん！心の奥で僕はずっと、これを望んでたん

だ。本当に成功したらって、夢見てたんだ！だから……

幸せになれよ、アレン

兄さん、兄さん、兄さん！！！！

そう、これが兄さんとの最後の会話で、最後の言葉。

どうして、こんなことになったのだろう。あの時、反対していれば、兄さんは助かったはずだ。

僕がバカなせいで、兄さんを失ったんだ。

ねえ、兄さん、今は何処にいるの？もう一度会いたいよ……あの日から僕は、兄さんに手紙を書くことにしたんだ。届かなくてもいいんだ。

今、僕はね、兄さんを蘇えらせようとしてるんだ。

また、禁忌を犯すんだ。

ごめんね、兄さん。こんなバカな弟で……

死神から人間にかえることは禁忌。人間を蘇えらすことも禁忌。

この二つの禁忌を犯して出来るものは、悪魔と呼ばれるもの。それは詳しくは知らない。

兄さんだって、こんなこととしてほしくないよね？

悪魔なんかに造りかえてほしくなんかないよね？

でも、僕はもう一度に兄さんに会いたいんだ。だから、兄さんを造りかえる。

本当にごめんね、兄さん……

第二話（後書き）

アレン君の思いです。

第三話

ドイツ・ベルリン

開け放たれた窓から風が吹き込み、部屋の空気を喚起する。

実体……人間動揺と同じ状態となった死神・ミーエルは風を感じながら何かを考えてはいるように思えた。ミーエルはなかなか、自分の故郷であるミュンヘンに足を進めようとはしなかった。

弟・アレンが心配なのはわかっていても、そのもとにはいけないのだ。

ミュンヘンに行くのをためらっているミーエルは、空ばかり見ていた。死神となるのを決めたのはアレンを救うためだった。後悔なんてしているはずもない。

もし自分が死神になっていなかったら、自分とアレンは死んでいただろうと、思っていた。

ふと、魂を預かる門が眼の前に現れた。門の扉が開き、声が聞こえた。

ミュンヘンに行くのではないのか？

「……………」

なぜ、ミュンヘンに行かない。行けば弟に会えるのだぞ

「……………」

会いたのに、なぜそれをためらう

「……………うるさい」

一目見るだけでもよからう。会いたくないのか？

「黙れ！お前に何がわかる！」

ほう……

「何も知らないくせに、知ったような口を聞くな！」

ならば、お前に忠告を伝えよう

「何」

お前の弟は、お前を蘇えらせようとしている

「嘘だ」

本当の事だ。魂がそう云っている

「あいつがそんなことするはずない！」

人間ってのはよくわからない生き物だ。だが、そいつの魂がそう云っているのだ

「俺は……そんなことをするために、あいつを生かしたわけじゃない」

なら、弟に会いに行け。会って、お前の思っていることを言え

「……」

ミール、ミュンヘンに行け。行くのだ

そういうと、門は扉を閉じ、消えていった。さっきの言葉が耳に残る。

何度も頭の中で木霊する。

ミールは窓から哀しい眼で、青空を見上げた。涙なんて何年も前からでなくなっていた。

そして、ミールは呟いた。

「アレン」

第三話（後書き）

感想をください

第四話

悪魔。それは、人が人を蘇えらせた時と死神から人間にかえる時にできるものである。

悪魔は自分を造った者と死んだ者、あるいは死神だった者になります。多い。それを、ドッペルゲンガーと呼ぶ者も多い。

こういうことが出来るのはごく一部だけ。魔術でも錬金術でもない、特別な術。

魂を生け贄に、復活させることを許される術。最大の禁忌だった。死神・ミエルという名は仮の名前だった。死神は生きていた頃の名前を忘れ、仮の名前で仕事をする。それが死神になった証拠。ミエルとアレンがその特別な術を知ったのは、まだ、幼い頃だった。

両親は優しかった。だが、事故と病で早くに亡くなったのだ。まだ、ミエルが7歳の頃だった。

両親が死に、ミエルとアレンは同時に思った。

//お母さんとお父さんを蘇生する//

もともと、父親が特別な術を研究していた身だったのだ。ミエルとアレンは出来るだけの情報をかき集めた。

そして、その結果。魂を生け贄に復活させる術をみつけた。

二人はそれを試した。蘇生は失敗に終わった・・・・・・

二人は天使から罰を受けることとなったのだが、ミエルがアレンだけとは、無理を言い、自ら死神となった。

死神になって、6年経った今、ミエルはドイツにいる。自分の故郷の近くに。

ミエルとアレンの故郷はドイツ・ミュンヘンにある。都市である

ベルリンに、よく行くこともあった。そんな思いでが、アレンの記憶に残っているというのに、ミーエルは徐々に消えていく。

死神になった者は、自分の名前を忘れると、次は記憶が消えていく。全て忘れると、仕事がいやすくなるのだ。

今までの思いをためていると、どうしても仕事に差し支えてしまうのだ。これを決めたのは神。

ミールは全て記憶が消える前に、弟・アレンの姿を…….と
思い、ミュンヘンに行くのだ。

後少しで、記憶がなくなるミールにとって、それは命令に背いてもやりたいことだった。

だが、ミールは現在、ベルリンにいる。人間動揺として。

ミーエルの魂は門の外だが、天使により支配されているのだ。あの時、死神にでもなっていなかったら、アレンは死んでいただろうと、ミーエルはそう思っている。

そんな兄弟を、神はお許しくださるだろうか？

禁忌を犯した兄弟を、神はお許しくださるだろうか？

兄には罰を、弟には生を。

そんなこと、神はお許しくださいさるだろうか？

ええ、ええ。

神がそんなこと、お許しになるはずがございません

禁忌を犯した兄弟を

神はお許しにはなりません

そう

決して、そんなことはないのですから・・・

第五話

ドイツ・ミュンヘン

ミーエルはベルリンからミュンヘンに移動した。ミュンヘンについたのはついさっきだった。

懐かしい街の様子、市場などをまわって見ていた。

ミーエルは自分の家に行く途中だった。だが、すれ違った人が眩くようにミーエルを呼んだのだ。

「兄さん？」と。

ミーエルは振り向いた。そこには、弟・アレンの姿があった。アレンは今にも泣きそうな顔をしていた。ミーエルはその場を立ち去るように走り出した。

「待って！」

アレンはミーエルの後を追った。だが、すぐに見失ってしまった。

「兄さん……」

ミーエルは死神に戻っていた。あのまま、アレンといたらやばかっただろう。

息が荒くなっていた。

ミーエルは下唇をギュッと噛み締めた。

でも、元気に暮らしていたのだから、よかったとミーエルは思った。深呼吸をすると、ミーエルは仕事へと向かった。

もう、アレンには会わない方がいい。絶対に……

アレンはカフェで休んでいた。さっき出会ってしまった彼のことを考えていた。

「兄さんに似た人なのかな・・・それにしても、偶然すぎるよ」
眼には涙が浮かんでいた。

泣きたい気分だった。いっそ、思いきって泣こうかと思ったが、泣けなかった。涙がたまるだけだった。アレンは一瞬、悪魔かという思いが、脳裏をよぎった。

「誰かが兄さんを造ったのかな・・・」

禁忌を犯した兄弟を、神はお許しくださるだろうか？

兄には罰を、弟には生を。

そんなこと、神はお許しくださるだろうか？

ええ、ええ。

神はそんなことお許しにはなりません

そう

そんなことはないのですから・・・

第五話（後書き）

いうことが・・・
感想ください！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2378a/>

天使の罰

2010年10月9日21時06分発行